1 風土と日本人の生活

▶ pp.146～149

まれびと ―折口信夫

てつとりばやく，私の考へるまれびとの原の姿を言へば，神であつた。第一義に於（おい）ては古代の村々に，海のあなたから時あつて来り臨んで，其（その）村人どもの生活を幸福にして還る霊物を意味して居（い）た。

（折口信夫『国文学の発生（第三稿）』「折口信夫全集」中公文庫）

霊魂の行方 ―柳田国男

無難（ぶなん）に一生を経過した人の行き処は，これよりももっと静かで清らかで，この世の常のざわめきから遠ざかり，かつ具体的にあのあたりと，おおよそ望み見られるような場所でなければならぬ。少なくともかつてはそのように期待せられていた形跡はなお存する。村の周囲のある秀（ひい）でた峰（みね）の頂から，盆には盆路（ぼんみち）を苅（か）り払い，または山川の流れの岸に魂（たましい）を迎え，または川上の山から盆花を採（と）って来るなどの風習が，弘（ひろ）く各地の山村に今も行われているなどもその一つである。霊山の崇拝（すうはい）は，日本では仏教の渡来よりも古い。

（柳田国男『先祖の話』「柳田国男全集 13」ちくま文庫）

先祖祭り（1）

我々の先祖の霊が，極楽などには往ってしまわずに，子孫が年々の祭祀（さいし）を絶やさぬ限り，永くこの国土の最も閑寂（かんじゃく）なる処に静遊（せいゆう）し，時を定めて故郷の家に往来せられるという考えがもしあったとしたら，その時期は初秋の稲の花のようやく咲こうとする季節よりも，むしろ苗代（なえしろ）の支度（したく）に取りかかろうとして，人の心の最も動揺する際が，特にその降臨の待ち望まれる時だったのではあるまいか。そうしてそれがまた新しい暦法（れきほう）の普及して後まで，なお農村だけには新年の先祖祭を，あたう限り持続しようとした理由でもあったのではないか。

（柳田国男『先祖の話』「柳田国男全集 13」ちくま文庫）

先祖祭り（2）

御先祖になるという言葉には，二つのややちがった意味があると言っておいたが，煎（せん）じ詰めてみれば二つとも，盆にはこうして還って来て，ゆっくりと遊んで行く家を持つように，という意味であることは同じであった。以前はあるいは正月と二度，もしくは春秋の彼岸の中日その他，別に定まった日があったように私は考えるのだが，その点はどうきまろうとも，とにかくに毎年少なくとも一回，戻って来て子孫後裔（こうえい）の誰彼と，共に暮し得られるのが御先祖であった。

（柳田国男『先祖の話』「柳田国男全集 13」ちくま文庫）